

ふるさと、風

第103号 (2014年12月)

風に吹かれて (81)

白井啓治

『師走の声聞いて木枯らしの踊る』

12月に入ったと思ったら木枯らしが即吹き始めた。これは若しかしたら寒すぎる選挙を嘆いてのことかもしれない。

茨城県議選は、予定されていたものであるが、衆議院選は訳の分からぬ解散権の行使で、政権延命を図ろうという税金の無駄遣いと言われても仕方のない選挙と言える。消費税延期は選挙で問うような問題ではないだろう。集団的自衛権を閣議決定するのであれば、消費税延期もそうすればいいだろうにと思ってしまう。

選挙という多数決の原理について、この会報にも何度か述べてきたのであるが、改めて少し述べてみたい。

多数決というのは、民主主義・自由主義の根幹をなすものであるが、それは一般に認識されている「数は力」とは大きく異なるものと言える。物事の決には多数の賛成を持って決められることは民主主義の根幹であることは言うまでも無いことであるが、手段に関わらず数を集めればそれは決のための力となる、というのは民主主義の根幹から逸脱した考えである。

多数決とは、決まった事は全員が決めたと同様であり、そのことへの責任は投票権を持つ者全員が負うということである。決定、施行後に何か不測のことが生じた時に、自分はその時反対した、は許されるものではなく、免罪符にはならないのである。

投票獲得数によって選出される議員においてもそうである。何かの失態や不正によって議員を止めるような事態が起きた時も、有権者全員にその責任があるのである。自分はその人に投票しなかったというのは、有権者としての免罪符にはならないのである。

民主主義において、投票権を持つことの責任とは賛否・成否の両面にあることをよく認識しておかなければならないのである。その事から今回の選挙を考えると、一票の格差は違憲状態にあると判決の出された中で解散権の行使であることに有権者はもつと怒らなければならない。

平等に与えられなければならない一票の選挙権がある地域だけは二人で一票というのでは民主主義とは言えないし、ましてやこうした中で「数は力の論理」の正当性は成り立たないのである。一人一人が平等の一票である時に、民主主義としての多数決は初めて成り立つのである。

小学校で習う様な基本的すぎる事ではあるが、

ふるさと風の会会員募集中!!

会報「ふるさと風」も、お陰様で今年9月号で創刊100号を迎えました。ふるさと風の会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費)

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

ふるさと風の会 <http://www.furusato-kaze.com/>

真実の基本とはごくごくシンプルなもののである。理屈をこねまわして解釈し、説明するものは決してないのである。一票を持つ者は、その賛否に関係なく結果への責任もあることを認識し、国民の権利としての投票行動をしてもらいたいと願うものである。

この選挙にかかる費用は数百億という。この原資は自分達の払った税金である。このことを考えると、無駄遣いをさせるわけにはいかない

『ペシヤンコ』にされる

菅原茂美

人類は、人災・天災から永劫に逃れられそうにない。まず人災だが、折角築いた文明も、公害や経済政策の失敗。そして悪意による犯罪や、失念・怠慢により大きな事故を招く。テロやサイバー攻撃など、狂気の至りだ。更に会社などが、個人の尊厳を踏みじじる「過労死」など絶対に許せない。そして究極は「戦争」による侵略。いつの世も、強者が弱者をペシヤンコにする。

天災はなお酷い。文明の進歩により、公共インフラなどをいかほど強化しようとも、大自然の脅威は一瞬にしてそれを押しつぶす。人類は万物の霊長とか言つて、自然を征服したような錯覚で、大見得を切るが、毎年やってくる台風や竜巻、そして巨大な地震・津波・噴火などの前では、風前の灯火。いとも簡単にペシヤンコにされる。

【どんな文明の利器も、巨大な自然災害の前にあつては、為す術もない…などと大口を叩くと、世界に誇る日本の物造りスペシャリストからは『小生意気言うんじゃないよ』と怒られそうだ。しかし、たまたま薄い地殻の気まぐれで、噴火などの大事件に巻き込まれると、人知では手の施しようがない…と言う事。日頃、各種技術者達の懸命の努力により、多くの文明の恩恵を受けている事には、心から感謝を申し上げている。】

*

人類は文明を獲得して、自由・平等・平和などを憲法で保障し、有り難く「宝」を手に入れたかに見えるがそれは表向き。ならず者はどこにでも居り、他人の尊厳を簡単に踏みじり、ペシヤンコにする。コソドロから、ブラック企業、そして

戦争好きのならず者国家。戦争体制突入の軍事国家は、人の命を虫けらの如く、消耗品扱いをする。

人間の人間たるゆえんは、公德や倫理に裏打ちされてこそ、崇高な存在と言える。それが、簡単にペシヤンコにされて、何が文明の進歩か？

科学の進歩により人類は、諸々の物質文明を繁栄させた。駆けだしたら加速し、途中で廃棄物などが環境を汚染するなど、顧みる暇もなかった。やっと気が付いた時にはもう遅く、自然界を有毒物質で埋め尽くし、絶滅危惧種が多数発生。地球温暖化などで人類の生存を脅かすハメとなった。暴走車はブレーキを強く踏み込む叡智が必要だ。

物質文明が進化すると社会資本など、きらびやかに充実する。人々は偉大なる文明の繁栄とか言つてそれを讃える。しかしそんなものは、自然の大災害の前には砂上の楼閣。

東日本大震災は¹⁴年3月¹¹日現在、津波などで死者15・884名、行方不明者2・633名。あまりにも凄惨被害に身の毛もよだつ。

私は震災後すぐ、宮城県のある漁港を訪ねたら、巨大な津波により、あの分厚いコンクリートの岸壁が、いとも簡単にめくれ上がり、建物など見る影もなかった。漁港近辺の民家は、家屋の基礎部分のみ残り、木造の建物はほとんど残っていない。漁船が二階屋の上に乗っかっている。巨大な津波は、瓦礫の山・山・山。なにもかにもペシヤンコ。人間の力の「ひ弱さ」をしみじみ感じさせられた。

又、ゲリラ集中豪雨は、ガケ崩れ↓土石流となり、やっと手に入れたマイホームを、一瞬で破壊し、命を奪い、押し流す。更にライフラインを切断。道路・鉄道を寸断し集落を孤立させる。そして火山噴火の恐怖。日頃、秀峰とあがめて

いる故郷の霊山も、一瞬で地獄と化する。どんなに智慧を絞る、どんなに準備を施そうが、薄皮饅頭のような地殻表面の皮膚の乱れは、気まぐれである。御嶽山の悲劇は目に余る。

この度の御嶽山噴火の災害を受け、全国に活火山は110座あり、そのうちでも⁴⁷座は特に危険性が高いと言われているので、早速、シェルターの設置など検討されている。その中のある山の自治体は、国の補助がなければ、シェルターの設置は無理だ。国は早速検討を願いたい…などと発言していた。なにを仰いますか？ 地元は、その山のお陰で、観光客を呼び、スキー場なども繁栄しているという。ならば自力で災害対策をするべきで、何もかも国に頼る体質は、非常識である。できないのならば、入山を禁止するなり、入山料を、しこたま徴収すればよい。国の巨大な借金は、なぜ生じたかを、しみじみ考えてもらいたい。

尤も日本は、多くの税金は国税。地方税は微々たるもの。国は地方に交付金として経費の一部を分け与える…という体質も鼻持ちならぬ。全国一律に交付金で縛る体質は、地方の活力を削ぐ。自治体というのだから、地方は自立できる税体制を整わなければ、成熟社会とは言えない。外交・防衛・検疫など、国家でなければならぬものは、国税で賄うが、地方が自治に要する税収は、地方に譲るべきである。道州制の理念もそこにある。

地震や集中豪雨によって、崖崩れや土石流被害が勃発する。今年、広島市で起きた崖崩れは、花崗岩が風化してその上に乗っている土砂は、豪雨により滑りやすいとのこと。⁷⁴名も犠牲者が出た。行政がそのような土地を、「土砂災害危険区域」に指定しようとする、土地の評価が下がるので、

住民は反対であったという。全国にそのような危険区域は7000か所もあるという。広島を契機に、早急に対応策を講じるべきである。

私は野次馬と言われるかもしれないが、人類進化の過程で噴火というものが、いかほど大きいかと、いつも思っているので1991年、雲仙普賢岳噴火の直後、早速現地を視察した。自分の目で見てものを考える事が大事とも思っている。噴火のマグマは火砕流となり、麓を埋め尽くし、民家の2階の屋根だけが焼け残っていた。また焼け残った電柱は上の方2メートルぐらいが溶岩流に、ぴよこんと残っていたのが印象に残る。被災者は火山学者など死者行方不明者43名。制止を聞かず報道関係者が火砕流取材のため、深入りし、帰って来ないので、警察消防が捜索に入り、多数二重遭難した。報道関係者は住人が避難した民家に不法侵入し、撮影用に電源を無断使用し、社会の非難を浴びた。なお、普賢岳は、1792年にも大噴火を起こしており、山体崩壊と、これによる津波で「島原大変・肥後迷惑」と言われた。肥前・肥後合わせて死者行方不明者15・000人と言われ、日本史上最大の火山噴火災害となった。

また巨大地震の脅威を確認するため1995年の阪神・淡路大震災も直後、早速見に行ってきた。震度7は、倒壊家屋が軒並み。死者6434人、行方不明者3名、負傷者43・792名。近代都市神戸も、自然の脅威には見る影もなかった。

更に、どこぞに火山噴火があり、マグマが溶岩流として大量に流出すれば、火山内部の容積が減少し周辺は陥没する。それが海岸地帯であれば、一瞬にして街ごと海底に沈む。人類が営々と築いた文明とやらが、明日は海の底。人の力のなんと

儂いことか。イタリア南部・ヴェスヴィオ火山の噴火(AD79年)は、古代都市ポンペイの街を一瞬にして海底に沈めた。大自然の怒りは怖い。

*

さて、人類の文明発祥を、いつとみなすか？

クロマニヨン人の洞窟壁画や彫刻も、芸術とみなし得なくもない。しかしメソポタミアで今から13・000年前、狩猟採集の流浪生活から、農耕牧畜の「定住生活」を始めた時点を以って、現生人類の文明発祥時期と仮定して話を進める。

人類はおよそ40万年前頃から、山火事で熱の通った肉などではなく、意図して「火」を用い、食べ物に熱を通すようになってから急に大脳容積を増す。人類の大脳は、400万年前の原人アウストラロピテクス・アファレンシスで450cc(現在のチンパンジーは400cc)くらいだったが、今日の1400ccになるまで、時間と平行して増加したものではなく、初期の内は極めてなだらか。後期になって急速に発達したものである。従って最も初期の石斧等は、100万年も全く同じ形で、姿形が更新される事はなかったという。尤も大脳は大きければ優れているというものではない。最後に進化した厚さ5mmほどの皮質が文明を生み出しているが、その内部の大部分が本能を司り、皮質の活動を抑え、野生の本性を露呈する。

さて、文明発祥を引き起こした定住生活が始まると、大脳は益々発達を遂げ、諸々の道具を發明。

言葉も複雑化し、身にまとう衣類も進化し、社会構造も急激に充実して、文明は繁栄した。飢えに苦しんだ長年の苦勞が身にしみているので、その日暮らしの食糧調達から、日頃、心がけて、食糧の「備蓄」も始めるようになった。すると、狩猟

採集時代は、どんな少ない食糧でも分け合って、みんな仲良く飢えをしのいできた。なのに、備蓄が習慣づくると、欲の深い者は、独り占めをするようになる。腕力は権力へと発展する。ずる賢い者は、我こそは「王」なり…と宣言し、権力をほしいままにする。大方、国家の誕生というものは、そんなところであろう。ここに持てる者と持てない者との間に「格差」が生じる。当然、部族内の争いへと発展し、或いは集落同士、隣村同士が食糧などの奪い合いをするようになる。縄張り拡張の争いが激化する。「備蓄」こそ抗争の源。

こういう事は人口も増え、社会の発展過程で、未熟社会での初歩的抗争と言える。それを防ぐため、経験を積んでいく中に智慧を働かし、約束事(法律)を定め、権力者が備蓄を独り占めできない工夫や、持たざる者がそれを奪う行為を罰するシステムが成長していったものと思われる。しかし、食糧を奪い合う図式が、その他の資源確保など経済闘争へと発展し、近隣国同士の仲互いを呼び、人類は21世紀を迎えてなお、醜い闘争の絶えない今日を迎えている。人間の「性(さが)」といえはそれまでだが、情けない事である。智慧を絞った解決法も、人類の源流にある「利己主義」という「怪物」によりペンシヤンコにされてしまう。

*

文明がいかに進歩しようとも、自然の威力の前には一溜まりもない。近代国家が築いた文明の見事な社会インフラもマグニチュード9クラスの強震には、あえなく倒壊。人類の奢りの鼻も、ペンシヤンコにへし折られる。強震は、古い木造家屋など倒壊を招き、火の気があつたら、大火災となる。街は火の海となり、多数の死者が出る。

1923年の関東大震災は震度6で、死者9万人。行方不明者4万3千人。負傷者10万人を超えたという。その直下型地震が、近未来、東日本大震災の余震として、再び首都を襲うような事があれば、目も当てられない惨事が想定される。

1145年前の貞観(じょうがん)地震は、その後23年間に、集中して巨大地震や阿蘇・富士・鳥海山噴火など13件も連発した。これらは、一連の地殻変動で、火山列島の宿命である。

本年は、東日本大震災の一連の地殻変動によるものか、しばらく大人しくしていた御嶽山が突如噴火を起こした。水蒸気爆発ではあったが、決して軽度の災害ではなかった。57名の死者と6名の行方不明者を出した。富士山の噴火も時間の問題と言われる。1707年の宝永噴火以来、富士山は鳴りを潜めているが、これも、いつ噴火してもおかしくないと言われる。

自然災害の中で、「火山噴火」ほど恐ろしいものはないと私は考えている。巨大噴火が起きると、その煤煙は成層圏にまで達し、太陽光は十分に地上に届かず、地球の寒冷化を引き起こし、動植物が大量に死滅する。地球の歴史を紐解けば、全生物のおよそ90%が死滅した事件が過去5億年間に5回も繰り返されている。噴火は海水の酸欠を招く。又、海底火山が噴火すれば、地球内部から硫黄が吹き出し、海水を酸性に傾ける。そのため、海中生物が大量死滅する。

【インドネシア・スマトラ島で、今から7万4千年前に起きた地球の歴史上最大級の「トバ山噴火」は、マグマ流出量2800立方kmと言われ、人類史に特筆される。その理由は、ホモ・サピエンスは、今から7万年前、数百人(現在の全人類の祖先の

規模で、アフリカを飛び出し、アラビア半島に定着して、一部、インド半島あたりまで歩を進め、数万人ぐらゐまで人口を増やしていった。ところが、このトバ山噴火のため、噴煙が成層圏にまで舞い上がり、動植物は大量死し、人類も大半が死滅した。残ったのはわずか1000人ぐらゐ。それは現代人のDNAを解析すると、ヒトDNAの多様性が、著しく減少する「ボトルネック(遺伝子の多様性減少)」が見られるので証明できる。このトバ山噴火により人類の大半が死滅したという学説を「トバ・カタストロフ理論」という。】

＊

さらに大自然の前に、人類のか弱いところは、微生物との戦いである。今アフリカで起きている「エボラ出血熱」騒動。ほぼ1万人感染し、5千人が死亡。確かにこの病気は、致死率が高い。アフリカに色気を出している中国にこの病気が侵入したら、人類滅亡につながるかねない。1918年のスペイン風邪(世界で4千万人死)を忘れてはいけない。幸いエボラはインフルエンザのように、飛沫感染するものではないので、発生時、確実な感染防止策が講じられれば、流行を阻止する事ができる。最近カナダ人ジャーナリストの日本での初の疑いの例は、幸いにも陰性であった。

先日アメリカの看護婦が、アフリカでエボラ患者に関与して帰国し、感染は陰性であった。しかし州法は潜伏期間を考え、3週間の自宅待機を命じたが、裁判所の許可を得て、自由外出などをした。どんな自由主義・個人主義を重んじる国といえども、防疫の根幹を揺るがす自由行動は絶対に許されない。それは「我がまま」の一語に尽きる。

【21世紀になれば「がん」など解決しているはず…と目論んでいたら、なんと死亡率の最高位。私など2度も大手術を受け、ペシヤンコにされたが、癌も予防できなければ医学もまだまだ未熟。】

人畜の最強の伝染病は狂犬病である。すべてのほ乳類に感染し、感染したらほぼ100%死ぬ。自然界には犬科・猫科はもとより、狸・イタチ・コオモリ・アライグマなど媒介者は無尽蔵。世界で毎年5万人ほどが死んでいる。現在日本や大洋州などを除き、ほとんどの国に本病は存在する。日本で犬の狂犬病予防注射率は半分以下で、愛犬家の意識の低さを露呈している。法治国家が泣く。過去の記録を読むと、これほど人類をペシヤンコにした恐ろしい伝染病はないと思う。

次に被害の多いのはマラリア。毎年世界で2億万人が死亡している。常在地で私は仕事をしてきたが、惨憺たるものである。経済発展至上主義は地球温暖化を招く。温帯にもマラリアが常在するようになったら、人類の滅亡を早めること間違いなし。その他人類を悩ます微生物は山ほどある。

＊

人類は、自然を征服したかのような錯覚を持つが、地球は地殻変動等ひとたび機嫌を損ねると、永年にわたり築いた文明など一瞬にして吹き飛ばされる。又、人類が築いてきた社会組織も、舵取りを誤ると、人権無視など悲惨な結果をもたらす。人類は神様の課長補佐ぐらゐの高慢な態度はとんでもない思ひ上がり。単なる自然界のか弱い一生物にすぎない。忘れてならないのは「謙虚」の一字。ペシヤンコにされる前に、己の奢りに気づづき、慎ましやかに暮らす事が肝心と考える。

天狗の話の二回目です。

石岡市龍明というところにある「長楽寺」という寺にまつわるお話です。もともと龍明という地名ではなく「猪内(むじなうち)」という地名でした。

この寺はそのお堂の美しさはなかなかのもので映画やテレビ撮影にもよく利用されています。この長楽寺の住職が天狗になった話が残されています。昔、筑波山、加波山、難台山、愛宕山などに、多くの天狗が住み、修業を行っていました。

この長楽寺には年とつた母と一緒に暮らしておりました。この母が死ぬまでに一度で良いから評判の「津島の祇園まつり」を見たいと言うのが口癖でした。

そして、孝行息子の長楽寺は何とかこの願いを叶えてあげたいと思うようになりました。

そして岩間山(今の愛宕山)の天狗のところにお願に行き、願いをかなえるために、毎日厳しい修行をしてとうとう天狗の仲間になることができたのです。

天狗になった長楽寺は津島の祇園祭が行われる日に、母親に目隠しをして、自分の背中に乗せると津島まで一晩で飛んでいきました。津島について目隠しを外した母親は目の前に広がる色とりどりの船や浜で繰り広げられるにぎやかな祭りに驚き、夢を見ているようで、もう思い残すことはありません。大喜びをしたのです。

そして帰りも目隠しをして寺まで空を飛んで帰ってきました。寺に着いた長楽寺は疲れたために母親には絶対に部屋をのぞかないでくれといって部屋に入って寝てしまいました。しかし何時まで

たつてもなかなか起きてこない長楽寺を心配した母親はついに約束を破ってそと部屋覗いてしまいました。するとそこには大きな羽を広げた天狗姿の息子が寝ていたのです。

おどろいて声を上げた母親の声に目を覚ました長楽寺は天狗姿を見られたためにそこにはいられずにどこかに姿を消してしまいました。これが石岡の長楽寺に残された話です。

さて、一方岩間の愛宕山にはこの長楽寺が天狗の十三番目の仲間になった話があります。

この山は笠間市岩間地区にあり、昔は岩間山と呼ばれ石岡市とは隣接しており石岡市の真家地区の山を越えた向こう側になります。この十三天狗の話は、江戸時代後期の有名な国学者「平田篤胤」が書いた「仙境異聞」に書かれている話です。

これによると、当時、江戸の町で天狗にさらわれてまた戻ってきたという寅吉少年が評判となりました。そこで、この平田先生が、自宅に寅吉を連れてきて住ませ、この平田先生の語った内容をそのまま書いたという形式の書物です。平田篤胤は本居宣長の後を引き継ぐ学者として有名な人で、決して作り話を書くような人ではないのです。平田篤胤は、神や異界の存在、さらには死後の世界に大きな興味をいだいていたといえます。天狗に連れられて天狗の世界を見てきた寅吉の話の要約すると、

・最初に連れてこられたのは獅子ガ鼻岩という岩が突き出ていることで知られる南台丈(今の難台山)であったが、そのうちに連れていかれる場所が岩間山になっていた。

・岩間山には十三天狗がいて、その首領「杉山僧正(そうしよう)」が寅吉の師匠である。

・岩間山には最初十二天狗がいたが、途中で長楽寺が加わって十三天狗となった。

・人間から天狗になったのは長楽寺だけで、その他は鳥や獣などが形を変えたものである。

・長楽寺はその十三天狗の首領となった。

長楽寺と杉山僧正とがどういう関係かはわかりませんが同一とも受け取れます。平田篤胤は山神として天狗の存在を真面目研究をしていて、その姿を絵師に書かせ、復古神道を説いています。しかしこの天狗の姿は「神仙道の本」(学研)の表紙などに使われていますが黒い着物を着て鼻が長い人の姿で、今の天狗のイメージとはかなり違います。

愛宕神社は徳一法師が創建されたといわれる謂のある神社で、防火の神を祀っていますが、この愛宕神社の裏手に「飯綱神社」があり、この神社に十三天狗が祀られています。飯綱神社の本殿はその神社拝殿の裏にある六角形をした金属製の塔(六角殿)です。この六角殿は六角形の石の上に建てられ、この石は手足などをかたどった亀だとされています。そして六角殿を背後から守って取り囲むように十三の祠が置かれています。そしてこの神社には毎年12月に「悪態祭り」という変わった祭りが行われます。

午後2時頃になると神社の社務所の前で、霞ヶ浦から朝とつた生きた魚の口にも状の葉っぱを通して手に下げられるようになります。また竹の筒に甘酒を詰めます(オバンド)。そしてその魚と竹筒を13天狗の祠に一つずつつりさげます。

2時半になると飯綱神社に白装束に烏帽子に足袋の姿をした天狗(氏子さんたち)が13人集合し、神主さんのお祓いを受けて、それぞれ本日の取りあ

いとなる食べ物が入った藁の束と竹の杖を受け取ります。お祓いを受けた白装束の人達(天狗役の氏子は山の麓へ移動して、山の下から祭りが始まりません。そして、山に登る間にお互いに悪態をつきあうのです。「なにをこのやろう」などという言葉を大声で時々皆に聞こえる大きな声をはりあげます。山の上の神社まで登る途中で、手に持った食べ物(藁筒など)を途中に設けられた祭殿や祠に置いておき、それを一般の参拝者が早いもの勝ちで奪い合うのが悪態祭りの行事になっています。

最後は飯綱神社、神社本殿(六角殿)、13天狗の祠とまわって祭りは終わりになります。

最後に拜殿で餅をまく時には大天狗一人だけが天狗の面をつけておこないます。

お祭りの食べ物を持ち帰るとその1年は無病息災と言ひ伝えられています。

本来のこの行事は戦前までは真夜中12時頃に女人禁制で男子のみで当時は天狗役になった氏子は七日間行屋にもり、餅をつき、井戸水で身を清めて祭りを行なったといわれています。

さて、この話とは別にもう一つ天狗の話があります。この岩間山の神社で力自慢の角力(相撲)が行われてきました。ある時10人抜き大会で、なみいる力自慢の男たちをことごとく投げ飛ばしていつの間にか姿を消してしまった男がいたと言います。これがどうも天狗だったのではないかと噂されました。それからしばらくして近くの慈雲寺(茨城町下土師)という寺の住職がこの天狗ではないかとのうわさが出てきました。この慈雲寺は水戸の祇園寺と同じ穢跡金剛堂といわれる建物が置かれています。この寺は当時小川町(現小美玉市)の天聖寺の末寺だったそうで、この二つの寺は12km

ほど離れていますが、2つの寺を行き来する移動が瞬間であったのだそうです。そしてある日寺に遊びに来ていた子供達が目を閉じている間に「津島の祇園」を見に連れて行ってくれたと話したというのです。ここでも津島の祇園が出てきます。この津島の祇園というのは日本三大川まつりといわれる愛知県津島の「尾張津島天王祭」(約500年前から行われてきたといわれている)のことだと思われませんが、これは江戸時代の天王社(牛頭天王を祀る)の総本山でした。それが明治の廃仏でほとんどが同じ祇園祭りをしている八坂神社(旧祇園神社・祇園社)となつてスサノオノミコトを祀るようになったのです。

津島神社(旧津島牛頭天王社)の説明によれば、「社伝によれば、建速須佐之男命が朝鮮半島から日本に渡つたときに荒魂は出雲国に鎮まつたが、和魂は孝靈天皇45年(紀元前245年)に一旦対馬(旧称津島)に鎮まつた後、欽明天皇元年(540年)旧暦6月1日、現在地近くに移り鎮まつたと伝える。弘仁9年(810年)に現在地に遷座し、嵯峨天皇より正一位の神階と日本総社の称号を贈られ、正暦年間(990年)には一条天皇より「天王社」の号を贈られたと伝えられる」とかかれています。

石岡のおまつりも江戸時代に中町にあった天王社(後に八坂神社となり総社宮に合祀?)で行われていた祇園祭が発展したものと考えれば元は牛頭天王社の祇園祭がそのルーツと言えるのではないでしょう。インドの祇園精舎の守護神「牛頭天王」は今ではスサノオに姿を変えてしまいました。また牛頭天王の子供達(総称「八王子」)は多くが「櫛稲田姫」になったといえます。なお、小川の天聖寺は今社殿はなく「天妃尊像」と墓地が広がるだけ

ですが墓石のほとんどが神道にのつた表示となつていようです。この寺は水戸の祇園寺の第三世和尚である蘭山和尚が宝永4年(1707)に水戸光圀の取りなしで、88歳の高齢でこの地に移ってきたのが始まりだといえます。天狗の話とどのように関係するのか興味深いところですが、これ以上はわかりません。

小川河岸から園部川を行く

伊東弓子

今回は私の勘違いから始まった。公民館と図書館の開館時間をごっちゃにして予定を組んでしまった。小川資料館にある、小川河岸周辺の模型と写真を見てから出発する計画は残念に終わった。お詫びし個人で見える機会をつくって頂くようお願いして小川河岸へ向かった。

「あゝ、反省だけなら猿でも出来る」の心境での出発だった。

駐車場となった小川河岸跡、以前の面影は全くない。町の一角の雑然とした場所だ。説明する側の思いと聞く側の感じはどんなに隔たりがあるだろう。水の流れる音もなく、土とコンクリートで覆われた旧園部川の上を出発した。

園部川は川中子との境辺りから姿をみせた。家や空き地の境にフェンスが回っている。篠が覆い流れの存在は目に入らないし、流れる音も聞えない。石垣塀の裏敷の裏でやと水の流れが顔をだし、水門から現在の園部川に流れ込んでいた。今園部川とよぶが、ほかに沢山ある。大江田川、大枝川、上流に行くと滑川、大谷川等、地域の人々

の生活や歴史上の出来事から名付けられたもの、地形の特徴からつけられたもの様々だ。八郷、真家の大滝山の滝が源流だった。七年前堤に沿って出かけたことがあった。友の実家はすぐ近くのよだ。幾つもの集落を流れ、その土地の人達の生活を潤していい顔を見せたり、大暴れして人々を手古摺らせたりしたろう。そして御留川まで自分の存在を固持しながら流れていったことだろう。季節と係わりいろいろの化粧をした日もあったろう。所々に桜の木がある。車もよく通る堤防だ。流れで魚釣りをする男達が数人いた。浮輪の少し大きな物に乗って糸をたれているのは初めてみた光景だ。

国道³⁵を横断して真っ直ぐ堤防を歩きたかったが、草ぼうぼうのことは分かっていたので歩道を行った。稲を作らない田だから、堤の草など刈ろうともしない様子が分かった。手入れもされないコスモス畑と化し、存在価値もない花は色褪せて茎を倒していた。

鹿鉄駅小川高校下跡は、枯草の花壇のようだったが、生徒たちの描いた絵は輝いていた。自転車置き場も若い明るい声はない。みんな大人になってそれぞれの道で頑張っているかなと思いつつ今日の秋晴れを喜んだ。田を確り作っている辺りの堤は草も刈ってある。草の伸び具合はさまざまだが気持ちよく歩けた。車を随行してくれている会員が先の方にいる。

「先に行く彼を追って乙女は走る」なんて小説みたいでしょう、と明るい会話が聞こえた。こんな事も歩きならではの楽しさだろうと思う。向う岸は川中子。「元の川はあの木立添いだ」「あの家の裏辺りだ」と、今は穏やかに流れる川のこと、

四十九折の激しい流れの頃の姿を語ってくれるのは、今日のリーダーでこの土地の人だからとても詳しい。よかったと思う。

新河岸の渡しは、下馬場と川中子を結ぶ渡し場で住民にとつては、とても重宝だったという。向かい側に川中子の越番があつて夫婦で暮らしていたが、移住してしまつて更地になつていて。小川八景「新川岸の渡し舟」と碑がある。家が五軒、そこを行けば下馬場の日限地藏堂、香取神社へと繋がる道できつと賑わつたことだろう。蓮田も葉が色づき首を曲げ始めた。少し紅葉し始まつた木々、草々が目につく。「泥棒草がくつついた」と懐かしい子供の頃の言葉が後の方から聞えたり、前の人が「広い場所ねえ、遮る物が何もないわ」と感動している。

ここから長い長い道のりだった。いよいよ川尻川だ。河口も近い。沢山の荷を積んでくねくねとやつてきた御船頭たちは、広い外川（御川筋）に出ると気が大きくなつたか、元来の気性の激しさや水の旗の権威を振りかざしてか、我物顔で突き進んだに違いない。「水戸藩玉里御留川」の二百五十頁前後には、訴訟の文書がいくつも載っている。自動車運転の人の心理にも似ているように思う。

川底が浅くなつたり、藩の荷を扱わなくなり、積み荷も竹類が多くなり動力船が入つて大きな汽船に河口で荷を積みかえていくような時代の影響を受け役目を終えていった。それと同じように川尻川の豊かな漁もコンクリートの堤防で滅ぼされていき、その堤防のおかげで広い水田は命を繋いできた。小川八景の一つ「川尻の落雁」の美しさは今いずこ。現代なりの情景にしか見えない。

途中から農道に入り広い水田の中を行つた。二

十歳の頃、この広い田の一角でお婆さんと話したことがある。手拭いを被つて綿入を着た丸く小さな方だった。何の話をしたのか覚えていないが、その人と五十年前の私の一シーンがここにはある。東の方に三味塚古墳が遠くに目に入る。昭和三十年早春、霞ヶ浦工事のため古墳の土を運び出した事で分かつたそうだ。中学生の私の耳には、「羽生の方で大した物が出たそうだ」と大人達が言っていたのがこの古墳のことだったことが後でつながつた。

太平洋の荒波を乗り切つて内海に入った人達が目にしたのは豊かな土地、以前から住んでいた人と争い、文化の交流など考えていくと夢が膨らむ。出土した品も珍しい物で、盗掘されなかつた事も有名だ。

韓流歴史物語に嵌まつている私には沢山の共通点を見るにつけ、遠い道のりをやつて来た私の祖先にも思える。

355号から小川町に向つて農道を帰り道に選んだ。昨年から今年にかけて小川城、取手山が脚光を浴びた。玉里地区では文化センター・コスモス二十周年の祝いの行事の中でとり上げられている。右に小川城、左に菌部城、間に流れる菌部川を挟んで戦つた話しをしながら双方を見比べてみた。小川城の高いこと。戦国の世の力関係をも想像できる。この戦いに纏わる紙芝居も出来たことを話し、それに係つた会員（妹のこと）も紹介した。菌部城に纏わる赤身の地藏堂が右奥に見える。

形を変え、場所を変え、残つて行くもの、消されていくもの、そうして歴史が流れているのだろう。町に入った。規模の大きかつた仁平河岸の面影はない。アパート一角に棚で囲まれて大木も枯れ

た姿で立っている。願いや安全を祈った石祠も石佛も崩れて積んである。当時の人々の苦悩も喜びもみな消えてしまった。振り向く人もいない。最後に残った河岸の更地から河岸の出来る以前の原野がしのばれた。

今回は十六人の参加だった。今回のチラシ配りで旧園部川を元に栗又四ヶ、田木谷、上玉里、川中子、小川の境を知ることがあらためて出来た。

「無暗にチラシをまくな」とお叱りを頂いた。

「区長さんには話して配ってます」と話す。「本当に必要な市長の印を貰ってこい」とのこと。

一瞬「ムツ」ときたが、今チラシの多いご時世だ。

忠告として受け取っておくことにした。会員が増えたことも嬉しい限りだった。又欠席の旨を丁寧に連絡くれたことも続けていく張り合いのものになる。玉里御留川を歩く会も北の区切りとして六回目が終わった。希望者で昼食をとりながら、次回からは西側にむけて出発することを話して閉じた。

お化け地蔵

小林幸枝

日光の東照宮の近くに「お化け地蔵」と言うのがある。と知り、行ってきました。東照宮から歩いてもすぐの大谷川沿いにそのお地蔵さんがあります。

お地蔵さんが並んでいる辺りは、大谷川が急流となっており、岩が削られて奇勝となっており「憾満ヶ淵」と呼ばれています。その道筋に苔生したお地蔵さまが約七十体ほど並んでいます。お化け

地蔵は、元々は「並び地蔵」と呼ばれていたそうです。お化け地蔵と呼ばれるようになったのは、行と帰りではお地蔵さんの数がちがうということが言われたためだそうです。

ここにはかつて慈雲寺と云うお寺がありました。明治三十年代に大雨による氾濫で流されてしまったそうです。その時に、残った住職の墓石を中心に石地蔵が並べられたそうですが、そこに次々お地蔵さまが運び並べられ、次第に数を増やして現在の数になったのだそうです。

流された山門が拾い集められて復元され、小さなお堂が再建されたのですが、現在は廃寺になっています。頭の亡くなったお地蔵さまには、代わりに石が乗せられています。

お地蔵さまの下を流れる大谷川の憾満ヶ淵は、男体山から噴出した溶岩によって出来た奇勝で、古くから不動明王が現われる霊地と言われています。川の流れが不動明王の真言を唱えるように響くので真言の最後の句「カンマン」をとり、憾満ヶ淵と名付けられたのだと言います。

観光に出かけた三人でお地蔵さまの数を数えたら、私は行と帰りの数がちがってびっくりしたら、連れの二人は同じ数で、私が間違えたのだと分かりホッとしたのでした。でも全部で何体かということになったら、みんなバラバラでまたまたビックリ。しかし、お地蔵さまは草や木に隠れていたりしたので見落とすだけと結論して、帰路に着いたのでした。

日光と言っても東照宮だけではなく色々な伝説を持った景勝、奇勝があるのだと改めて感心した小旅行でした。

歴史の里いしおかめぐり展 兼平智恵子

去る十一月一日〜九日、まちかど情報センターに於いて、兼平ちえこのふるさと散歩「歴史の里いしおかめぐり展」を開催させて頂きました。多くの皆様のご高覧を頂きまして感激でございました。有り難うございました。

この展示会は二〇〇七年、「霞ヶ浦、常陸国風土記を歩く会」の皆様へ、三回にわたるご案内に石岡市歴史ボランティアの会の会員として同行し、その折の同行紀を当「ふるさと風」に掲載しました。早速に「ふるさと風」の白井代表のすすめで、絵を添えた、兼平ちえこのふるさと散歩の冊子が出来上がりました。この絵のスケッチ画と想像画など、六十五枚（半紙の大きさ）の展示でした。

昨今では各地でふるさととの歴史をもとに街おこしが行われております。六四五年に大化改新が行われ、その次の年六四六年に現在の茨城県ほとんどが常陸国として誕生しその中心がここ石岡の地で、徳川の世になるまで続きました。

昭和五十八年、石岡市は茨城県より「歴史の里」に選定されました……が、市民の皆さんはこの歴史の里である内容についてはあまりご存知でない方が多いのに驚き、そして私は行方市より平成二年に、この地に住むようになりましたが歴史の宝庫に驚きました。現在の歴史のブームにのり、市民の皆さんが石岡の歴史を知り、そして触れることが、街おこしの大きな力となる事と信じております。

先ず、石岡の歴史入門として石岡小学校内の石岡市民俗資料館（金、土、日、祭日、九時〜十六時半開館、入場無料）、そして常陸風土記の丘公園内、展示室

古代家屋復元広場、鹿の子史跡公園（開園〓三月〓一〇月は午前九時〓午後五時、十一月〓二月は午前九時〓午後四時入園料大人三〇〃小人一五〇円 但しこの三施設のみ入園料です）他園内は無料となっています。尚三施設内には三月〓十一月中、石岡市歴史ボランティアの会の会員が土、日、祭日には案内を行っています。どうぞ次世代を担うお子さん、お孫さんそして友人とご一緒に郷土愛を育むためにもお尋ねになつてみて下さい。

今回の展示では、石岡市の国府跡を見学なされた京都府のご夫妻様から送って頂きました産経新聞夕刊に掲載されたエッセイをご紹介します頂きました。

エッセイは、去る九月七日、石岡市民俗資料館にご来館頂きました時の感想を産経新聞に投稿なされたものです。産経新聞東京本社に問い合わせましたところ、この夕刊は関西方面だけの配布と申うことでしたので、当会報にあらためてご紹介させて頂きます。心あたたまる嬉しいエッセイです。

「聞きたいひと言」京都府精華町 今井直（六八）

茨城県石岡市は、時間がゆつたりと流れるまちである。奈良時代には常陸国の国府が置かれ、国分寺・国分尼寺が華麗で荘厳な瓦を並べ、七重の塔がそびえていたという。風土記の丘や史跡公園が整備され、往時をしのぶ資料館がある。

私の国府巡りは、石岡で47カ所を数えた。68 全て巡るにはまだまだ遠い。わが妻は、伽藍配置とか蓮華文軒瓦とか私のうんちく話を聞いてはくれるが、あまり興味がないようだ。なのに嫌な顔

もせず、私の史跡行脚に必ずついてくる。1人より2人のほうがドライブは確かに楽しい。

小学校の校庭にあつた常陸の国府跡は、発掘調査の結果、国の史跡に指定されたあと埋め戻されて今は何も無い。資料館の職員が、校庭の片隅にある万葉歌碑へ案内してくれた。

庭に立つ 麻手刈り干し 布さらす

東女を 忘れたまふな

任務を終えて都へ帰る国司に、麻布を晒す田舎娘が私をお忘れ下さいますなど、切ない別れの歌だ。身分を越え、2人は親交があつたのだろう。歌碑は灌木の茂みの隙間にたち、乙女が人目を忍んで見送る姿を暗示しているようで、心憎い演出だ。

忘れたまふなーなんといじらしい言葉だろう！残念ながら、私は今まで誰にも言われたことがない。今さら、わが妻に期待は…。

駐車場に戻ると、妻はスマホで何やら検索していた。

「このお店の餃子、口コミ評価が4・6よ。食べに行こ！」

ん？…まあいいか、国分尼寺は餃子のあとで。

（夕焼けエッセイ・産経新聞夕刊 二〇一四・十・十五）

奥様との交わしがなんとほほえましいことでしょう、思わず笑みがこぼれました。ホットなつながりが心あたたかくしてくれました。平安京遷都から明治維新まで約千年もの間、日本の中心地として栄えた京都、レベルの高い文化財を保持する古都京都に住む今井様だからこそ奥深い読みに感動いたしました。千三百年の歴史が息づく、心休まる風景が広がる石岡の町との思いがけずのご

好評を頂き、喜びに浸っております。

お手紙の終わりには、短い滞在でしたが、石岡の人々の温かさにふれられたことが、今後長く印象に残ることと思います。よい旅の思い出がまたひとつ増えました、とむすばれていました。

どうぞお元気で奥様と楽しく残りの国府巡りが達成なされますようお祈りしております。

まちかど情報センターの職員の皆さん、九日間大変お世話様になりました。有り難うございました。

・落ち葉降る 府中城土壘 智恵子

【風の談話室】

2014年も今月号が最後。1年の過ぎるのが実に早く感じてしまうのは歳の所為なのだろうか。今年当会報も100号という節目の年でしたが、それもあつという間に過ぎ、次の目標である10周年に向けての歩みを始めました。今月も、この風の談話室は嬉しい賑わいを見せています。

《ヨイシヨ広場》（陸平をヨイシヨする会）

親子五人の那須旅行（2） 田島早苗

那須はそれぞれが生き残りをかけ、工夫を凝らしている様子がひしひしと伝わって来る素敵な観光地だった。見学場所が多すぎて、行き先を決めるのが難しい。

二日目は、とに角「那須ステンドグラス美術館」を見てみようという事に成り、遅い朝の出発になった。

イギリスで最もイギリスらしい田舎とも言われているコッツウォルズ地方の建物をモチーフに「はちみつ色」の黄色い石、ライムストーンで作られたと言う素晴らしい建造物に度肝を抜かれながら、終の紅葉が美しい広い庭園を歩く。まるで別世界に紛れ込んだような気分だった。

セント・ラファエル礼拝堂の左壁面に配置された美術館最大のアンティークステンドグラスには聖パウロの生涯、キリストの誕生などが描かれ、無信心の私さえ襟を正したくなるような荘厳の気に満ちていた。

やがて七百七十本のパイプを持ち、イギリスの教会で実際に使用されていたという、アンティークパイプオルガンの生演奏が始まり、敬虔な気持ちで耳を傾けながら、イギリス人の精神の一端に触れた様な気がしていた。三十分後には百年以上前に作られたアンティークオルゴールの演奏もあり、欧米の分厚い芸術の神髄に浸った一時を過ごすことが出来た。

次の見学地「那須ワールドモンキーパーク」では一転、現実の世界に引き戻され、強烈な臭いを放つ夜行性のサルを手始めに、世界中の珍しいサルを見学、その後ふれあい広場で「リスザル」の檻に入り、楽しいひと時を過ごすことが出来た。餌を与えるタイミングが難しく、父親以外の四人、キヤアキヤ騒ぎながら盛り上がりつつあった。

「シロクロエリマキツネザル」と「ワオキツネザル」とのふれ合では、子供たちに父親が引きずり込まれ、母親の私は外から見学、思いつ切り

楽しんでる家族を眺めながら幸せ一杯だった。

サル劇場ではニホンザルやオマキザルの巧みな演技に大爆笑、一演技終えた後でポーズをとる、サルのドヤ顔が可愛く、笑いが絶えない楽しい劇場だった「お母さんがあんなに喜ぶと思わなかった」と言う末娘の言葉に、日頃の言動をちよつぱり反省。

思いがけなく長居をしてしまったモンキーパークのお蔭ですっかり遅くなってしまう昼食、三時近くでは休憩時間に入っている食堂も多く、イタリアンレストランで苦手の食事を食べる羽目になり、これもまた思い出の一つと納得。

ゆつくり昼食をとって外へ出ると最早黄昏の気配が漂い、一路わが家へと急ぐことに成った。高速度に乗った頃には美しい夕焼け空に感嘆の声を上げる娘たち。「ここで一句をどうぞ」と言われても美しいものを十七文字に纏めるのは難しい、「那須連山動くパノラマ秋夕焼け」等と駄句を捻りながら幸せをかみしめていた。

思いがけなく実現した親子旅行。子供たちの丸抱えにダダ乗っかってしまったが、何とも居心地が悪い。でもよく考えれば子供三人最早四十代から五十代、此処では甘えてみても良いかな？と無理に言い聞かせ、それでも落ち着かない幸せいっぱい母親だった。

先月、田島さんの原稿がうまくメールに届かず、大慌てしましたが、今月もまたちよつとの騒動。慣れたら面倒なものではないのであるが、慣れるまでが中々大変。小生も、初めの頃は何度も失敗をしたものである。

今でもちよつと複雑になると上手くいかなくなる。

小生の場合、茨城県に越して来たことで、原稿を送るのに不可欠のことで、取り敢えず文章を送ることだけを覚えたのであった。それ以後進歩がないので、田島さんとは同じよちよち歩きの間である。原稿を送るのにいちいち郵便局へ出かける必要のないことを考えると、それだけでも大いに便利させて貰っている。

《読者投稿》

読者投稿のコーナーを設けたことで、準会員の投稿を頂ける人が出来てきました。今月も準会員になって頂けそうな方、藤絵様から投稿を頂いた。藤絵様には今後長くお付き合い頂けることを願っています。

もうお馴染みとなった堀江さんには、養生日記として暫く詩を書いてみてはどうですか、とお話したところ今月は早速二編の詩を投稿下さった。色々な方からの投稿を心待ちにしております。

アップルミント

藤絵 里子

木枯らしが吹き、木の葉の舞い散る季節、真紅の花が我が家の庭に咲いている。
アップルミントの花である。

これから向かう寒い季節に逆行するように、勢い強く今年も咲いた。台風十七号の三日前である。昨年もアップルミントの花に魅せられ、いつ咲くか待ち遠しかった。

自然は優しく心を癒してくれるが、一方で突然猛威を奮う。特に三年前の東関東大震災以後は日

本列島各地に大災害が多く起こるようになったように思う。

そんなある日、アップルミントの花が咲いた。嬉しいと言うより異様な不気味ささえ感じた。

『どうして今咲いたの？』

悲しくも伊豆大島を直撃した台風の翌日であった。その土地の人達が大災害を被ったこと、自分がその立場であつたら、と思うと素直に喜ぶことが出来なかつた。

そう言えば東関東大震災の後も無情に、すみれの花が我が家の庭に可憐に咲いた。

何もなかつたかのように・・・。

その時よりも、もっと複雑な気持ちだつたがアップルミントの花は秋空に向つて勢いを増して咲いていった。

いつしか、いつ迄咲くのだろうかと興味を注がれ観察するようになり、細い花びらの鮮やかな赤い花の勢いから元気を貰うようになった。

師走に入つても勢いは衰えず、クリスマススイブの前日、全ての花びらが散り終りを遂げた。

明日は楽しいクリスマススイブ「ありがとう、元気を繋げてくれて！」と、心の中で言つた。クリスマスが終わると今度は新年、お正月である。自然の摂理は素晴らしい。

慌ただしい師走の空、心なしか夕暮れ時は長くなり西の空が澄んで、気ぜわしい気持ちは和み、明日に希望が湧く。

新春、お正月を迎えると、名の通りこれから小寒、大寒を迎え、日の出は遅いがどこか春めいた気持ちになり、厳しい冬にも春への希望を持って過ごせる。

人間生きて行く上で様々な不条理が多く、よう

やく理性で平常心を保つ、これからも、いつ、何が我が身に起こるか解からない。自然災害、事故、病氣、その他、しかし生かされている間、自然の優しさに心より感謝し、英気を養い、江い色のアップルミントとテレビ、ラジオ、街から流れるクリスマスソングに心弾み、暮れ行く季節を満喫している。

養生日記

堀江実穂

『空を見上げて』

泣きそうな空を見上げて涙を流す
空は私の心の全てを読み取ってくれる
明るく晴れ渡つた空
暗く陽の光を拒絶する空
まるで私の心を見透かしている様に
泣いたり笑つたり怒つたり

朝起きて空を見上げて深呼吸する
晴れ渡つた青の空には生きている喜びが
青のない雲の垂れ込めた空には不安が
でもどちらにも生きていることを教えてくれる
空を見上げて思い切り笑おう
空を見上げて思い切り泣こう
空は生きている瞬間を教えてくれる

『恋は・・・』

あなたの姿を見ているだけで高鳴る胸

あなたと同じ空間に入ることだけで心が躍る
新鮮なエネルギーを与えられて
頑張ることが出来る

あなたを想うと心がすてき色に染められる
恋のすてき色は変幻自在の万華鏡
涙色にも宝石が光る

恋に恋している

風が私の背を押して

あなたの所へ行くことを唆す
恋に恋している

すてき色に染まった私を捜している私

詩とは、何かを説明するものではなく、思う心、感じる心を表現するものですから、堀江さんの様に統合失調症のような症状に苦しんでおられる人にはとても良い養生日記になるのではないかと思っています。暫く、養生日記として詩を詠み続け頂ければ、と思っています。

× × ×

さて今月はもう一件の投稿文があつたのですが、文責者としての自分を名乗らない投稿なので掲載を取りやめた。本来ならばここまで話して済むのであるが、この投稿者、この文を載せるも載せないもそちらの自由、と但し書きまで付してあつた。呆れてものも言えない。

当会報は内容が極左・極右・アナキーと何が来ても拒否することはない。だが、文責者としての自分を名乗れないような人の文は載せるわけにはいかない。匿名やペンネーム希望であっても編集局に文責者としての自分を名乗れない、また名乗らない者は当会でなくても掲載されることはない。

こうした自分を名乗らない、名乗れないのかも知れない…。投稿はネットに多く見られるが、ネットならこういう事が許されるでも思っているのだろうか。だとすると頭の程度が知れる。何時になく腹を立てているが、腹を立てる価値もないのが正解であろう。

《一寸一言・もう一言》

＝一寸一言＝

ベルリンの壁

打田昇三

民族分断の悲劇「ベルリンの壁」が崩されてから二十五年が経つとニュースで聞いた。平成元年（一九八九）十一月十一日（土曜日）の日本の新聞には一面トップで「東独が西独国境開放・ベルリンの壁、二十八年ぶり『崩壊』」（Y紙）と出ていたほか関連記事が三〇五面にあり、長い解説が付けられて、正に世界が注目する大事件だった。

敗戦で日本は主にアメリカ軍に占領されたが、ドイツは爆撃で破壊された後に先ずソ連の兵士数名がベルリンに攻め込んで来た関係で占領地が東西に分断されてしまった。首都は東（ソ連）、西（米英仏）に分けて占領されていたが、一九六一年（昭和三十六年）八月には何を血迷ったか東側が一夜にしてベルリン市内の国境を封鎖し全ての交流をストップさせた。馬鹿げた措置だがコンクリートの高い塀が築かれた。其の日に東地区へ外出していた市民は戻れなくなり、家族とも分断させられてしまった。西側へ、自宅へ戻ろうとした多くの市民が無惨にも射殺されている。

民族統合の機運が高まって壁が壊された原因はテレビにあった。東の市民は全体主義の宣伝テレビは見ずに西の自由な番組を見ていた。電波に国境は無い。自由を求める動きが東に起こった。

もう一つ、東ベルリンには早くから日本の大手建設企業が入ってビル工事などを行っていた。貿易センタービルなどが日本の協力で建てられた。ドイツも明治の文豪（医師・軍人）森鷗外が住んでいたアパートや「舞姫」の舞台となった聖堂などが完全に復元保存してくれている。日本の平和主義が誤れる全体主義を正したと思いたい。

「がん」研究最前線

菅原茂美

癌とはなんぞや？ 21世紀になれば解決済みと思っていたら、国民の三人に一人は癌にかかり、二人に一人は癌で死ぬ厄介者。超怪物である。

癌細胞が腫瘍という怪物に変身するためには、獲得しなければならぬ次の六つの関門がある。

①自分自身の増殖を促す能力（がん遺伝子）②増殖ペースを落とせ（がん抑制遺伝子）という警告を無視する能力③アポトーシス（自殺命令）をはね退ける能力④細胞の分裂回数を制限しているシステム（テロメア）を無視する能力⑤血管新生能力⑥周囲の組織に浸潤して転移する能力。これらを悉く獲得して、縦横に暴れまくっている。

癌は遺伝子の変化だけではなく、それを取り巻く「癌微小環境」が微妙な変化をもたらす。例えばメチル基（CH₃）が癌関連遺伝子にまつわりつくると遺伝子は活性化したり、逆に機能しなくなったりする。DNAというハードにメチル基というソ

フトが結びつく形は、娘細胞に受け継がれる。この事から化学療法は新たな展開が予想される。

一方「癌幹細胞説」もある。本来発生中の「胚」にある幹細胞は、自分自身を無限に再生する能力があり、未分化のまま分裂を繰り返す、成長して傷ついたり老化した細胞に置換する能力がある。健康な組織がこのような少数の細胞により維持されるのなら、腫瘍についても同じ事が言えるのではないか？ 沈黙を守っていた癌幹細胞が、生体の老化などにより、ある日突然狂い出す。

更にジャンクDNAと言いい、無用の長物と思われていたDNAがマイクロRNAを作り、それが癌遺伝子を活性化や抑制している。この夏私は癌にやられたが、多くを学びむしろプラスであった。

＝もう一言＝

子規の友人

打田昇三

正岡子規が夏休みに東大の友・菊地謙二郎を訪ねて水戸に行く途中で石岡に一泊した際に詠んだ「二日路は筑波にそふて日ぞ長き」の句碑が建てられた。実は平和的な其の句に反するような出来事が子規の死後に水戸で起こっている。

菊地家は水戸藩の重臣で、府中（石岡）藩の付家老（江戸詰め）であったと思われる。謙二郎は子規と入れ替わりに江戸に戻ったので二人は会えなかったが、子規は菊地家で歓待されたと言う。

夏目漱石とも親交があった菊地謙二郎は東大を出たあと仙台の旧制二高校長、さらに乞われて旧水戸一校の校長になった。その前に欧米諸国を視察して近代的教育を学んできた菊地は水戸中学で

「自由主義的教育」を実践しようとしたが頑迷な茨城の教育界が是を見逃す筈が無い。明治四十一年に新聞社主催で行った「国民道徳と個人道徳」という講演に対して神道関係者、国会議員、右翼団体などが一齐に反発し講演内容を書いた文書を国会で配布し、文部大臣に校長罷免の決議文を送り県知事なども辞職を要求したのである。

政治的圧力に潰された校長は退職を決めたのだが生徒が黙っていない。血書の連判状を作るなど反対運動を展開し同盟休校に突入した。菊地校長が暴走する生徒を宥めて身を引いた後も一部学生は暴徒化して逮捕者が出た。後に衆議院議長となった星島二郎が弁護人として登場している。この事件を契機に、自由主義教育の波に反した茨城は右翼の巢になって血盟団事件などが起こる。子規は此の旅で体調を崩し不治の病人となったのだが、それよりも友人を苦しめた茨城の文化的荒廃をあの世で嘆いていたに違い無い。

「結核」病の現状

菅原茂美

結核菌は1882年コッホにより発見され、空気感染し、喀血など重症化し、死亡率は高く、日本ではかつて「国民病・亡国病」と呼ばれた。日本は湿気が多いため感染率が高く、WHOから対策の強化を迫られている。政府も2020年の東京オリンピックまでに低感染国に入るよう、汚名返上に乗りに出した。(日本国内の結核罹患率は、人口10万人当たり、16.7人で、欧米先進国の4.5倍、又その半数は70歳以上の高齢者である)

現在世界人口の3分の1が本病の感染を受け、

1460万人が慢性活動感染者で、発症者890万人、毎年死亡者160万人である。その内、多剤耐性菌感染者は44万人で、15万人がどんな薬も効かず死亡している。WHO(世界保健機構)は、2035年までに罹患率を15年比95%減らす数値目標を掲げた。具体的には、新治療薬・新ワクチン・新診断薬の開発に重点を置く。

日本では、予防策として05年からツベルクリン反応検査を廃し、全員にBCG接種を行っている。大塚製薬は14年7月、多剤耐性菌に対する新しい治療薬の販売承認を獲得した。(前年欧州で承認済み)更に独法「医薬基盤研究所」は、呼吸器の粘膜に結核菌に対する特異的な免疫反応を誘導する新ワクチンの実用化を目指している。北大は結核菌の薬剤感受性を調べる安価で簡便な手法を開発した。これは発展途上国に大きな福音である。

私も行政獣医師は、人畜共通感染症防止対策に邁進している。例えば牛乳から牛結核菌が人に感染しないよう全ての乳牛を検査し、陽性牛は法令殺している。鶏・豚・牛肉も人畜共通感染症が人へ感染しないよう、全頭食肉検査をしている。

当会報は、今年も無事終了である。

今年は、通巻100号を迎え、大勢の応援者と共に100号祭を行うことが出来た。

特別自慢できるような会報であるが、唯一自慢できることは、会員になった人は、一度も休むことなく毎月、自分の思い、考えを書いてきた事である。この事は、出来るよう出来ないこと、大声で自慢しても良いだろうと思う。次の10年祭まで、脱落なく続けていきたいものである。

【特別企画】

打田昇三の『私本平家物語』

巻第二 (3・1)

- ・少将乞請(しょうしょうこうじょう)のこと
- ・教訓状(きょうくんじょう)のこと
- ・烽火之沙汰(ほうかのさた)のこと

現代の日本では「三権分立」が憲法に書いてあるから独裁者が現れることは無いと思うが、もし憲法を改正(改憲)して政治屋の好き勝手が出来ようになると平清盛時代の社会に戻ってしまうのであろうか?国会議員も訳の分らない政党が適当に掻き集めた候補者の枠の中でしか選べない現行制度だと、当選した議員も党の方針に従って賛成か反対かを表現するだけのロボット集団になり芸が上手な猿でも間に合うことになる。民主的?な我が「ふるさと」風の「の会」で政治談議をした際に「多数決だけで決まる国会ならば、野党になった議員はどうせ意見が通らないのであるから居ても無駄、自動的に地位を失って次の復権選挙に備える!制度にしてはどうか!」という、実に素晴らしい迷案?が出された。膨大な経費の節減になるから直ぐ実行して貰いたいものである。

衆議院が本来の任務を忘れて党利党略だけで機能しては困るし、また「国会の審議を慎重にする」つまり衆議院のチェック機能が任務である参議院までが政府の使徒で埋められてしまうと、国民の声の全部を反映することが出来なくなる恐れがあると思う。民主主義と言うのは、多数決であつても少数意見を

無視または黙殺することは許されない筈であるから、参議院の本来は「ねじれて」いるべきであり、そう言う意味では「平家一門に有らざる者は人に非ず」と誰かさんが言った平安末期は全てが平清盛の思いの俣の事が出来た理想的？「逆ねじれ」状態であり国会も政党も必要が無くて何かするにも話は早かった。

良く考えると、この事件が起きた当時の平清盛は高倉天皇の母方伯父であり、先々代の太政大臣で有つても、公的な地位は一族の隠居に過ぎなかったのである。従つて平家に対する陰謀は国家社会に対する陰謀とイコールでは無いから天皇や法皇の近臣を逮捕させる権限などには無い筈である。にも拘らず平清盛は検非違使を使つて自分に敵対しようとする者たちを次々と捕えて処刑している―是こそが理想的？な「権力」の本来の姿であり、後の時代に楠木正成が旗印にしたと言う「非理法権天（ひりほうけんてん）非は理に勝たず、理は法に勝たず、法は権に勝たず、権は天に勝たず」の法則に従えば、出過ぎた権力を抑えるために天が徐々に威を示し始める、つまり平家による権力の乱用が目立つようになって来たことに対する反発の芽が各地に生じる。ことになるのである。

然し乍ら戦時中の軍歌では無いが「♪天に代わりて不義を討つ」と言う立派な名目で平家を越えようと思つた西光法師や藤原成親らは、大義名分よりも自分たちの不平不満解消を優先した関係でお粗末なクレーダーを計画した為に天祐が得られず、暑氣払いの宴会程度に軽く誘つた多田蔵人行綱の裏切りで簡単に捕えられてしまった。思いつきの「鹿ヶ谷会合」に参加した連中には其れが運の尽きとなったのである。

そして今回の最初の章段は成親の子である丹波少

将成経に逮捕状が出て平家に捕らえられる話である。しかし息子の方はお調子者の父親と違つて直ぐには拘束されなかった。逮捕状が出た時には後白河法皇の許に出仕していたし、清盛の弟の娘婿であつたから平家に近い。そこで平家一族の大物による乞請（勅命嘆願）が行われるのであり、その経緯を説明しているのが此の章段である。

少将乞請（しょうしょうこうけい）のこと

仮名で書くと、少額の借金をお願いするようなタイトルである。同じ内容の源平盛衰記では「丹波少将召捕らるる事」になつてゐるから表現が逆でも其の方が分かり易い。「少将乞請」と言うのは捕まつた少将に関して平家の者から清盛に嘆願が行われて身柄を預けられた―ということである。「西光被斬」でも触れたが、実は藤原成親の一家は平家と二重三重の因縁がある。そういう関係なのに、なぜ平家打倒の陰謀に加担したのか？と言えば藤原成親は「馬鹿だった！」の一言で済ませられるが、成経の場合は父親より増しな人物らしいので父親に引き摺られたのであろうか。結果論だがあと数年我慢していれば源頼朝の挙兵があり平家が滅びるのである。尤も其の段階になると平家に近い者は同族並みに扱われたかも知れないから対応が難しい。此処は諦めるしかない。

現代の政治家で言えば軽率な発言をしたり所属政党のハシゴを繰り返したりするような人物の藤原成親は、お粗末な謀反計画がバレて平清盛に呼び付けられ、其の俣で牢屋に放り込まれて人生は終わったが、息子の丹波少将成経は重罪なのに破格の扱いを

受けるのである。まず事件発覚の夜は後白河法皇の院庁で宿直勤務に就いていたから、一時的ながら逮捕は免れた。夜が明ければ退庁出来るのだが、その前に成親の家来が来て急用だと言つて呼び出し、成親が謀反の疑いで平家屋敷に拘留されたことを伝えた。家族の幼い者まで捕らえられるという樂觀的な情報まで入つていたので驚きながらも成経は「この様な大事を、なぜ宰相殿がお知らせ下さないのであらうか？」と言つている時に、其の宰相からも同様ながら此方は詳細で且つ厳しい知らせが届いたのである。

前にも書いたが「宰相（さいしょう）」とは参議の唐名である。本来の参議は「民情視察」国民生活の実態を政治に反映する「任務を持つ重職であり中納言に次ぐ正四位の位階が与えられていた。ただし平家の時代であるから一族の者の肩書として任命されただけであり、宰相でも最少でも民意などに配慮している暇は無かつた。自分の肩書が増えることを願うのが仕事である。その点では現代も同じではあるが：この場面で宰相と呼ばれているのは清盛の異母弟・平教盛（たいらのりもり）のことで藤原成経の妻は教盛の娘であつた。

教盛は、清盛・重盛亡き後に平氏頭領となつた宗盛の補佐役として八年後には壇ノ浦に沈んだ人物である。息子の教経（のりつね）は寄せ手の大将・源義経を苦しめて壮絶な戦死を遂げている。

教盛の屋敷は平家一門の拠点である六波羅の正門内側近くに置かれており「門脇（かどわき）の宰相」と呼ばれていた。また婿の藤原成経が丹波少将と言われたのは役職として（飾りではあるが）丹波守に兼ねて近衛府の少将に任官していたためである。後代の軍人と違つて当時の少将は近衛府にしか置かれてい

ない。丹波守は従五位下であるが、近衛少将は常陸国守より上の正五位下に叙される。平家一門に連なるからその官位なのであるから清盛が怒るのも無理は無い。

門脇の宰相は、清盛からの別命で「相違なく丹波少将を西八条の屋敷へ連れて参れ」と言われたので取り敢えずは教盛邸まで来るように：成経の許に使者を出したのである。成経は既に状況を察していたから、生きては戻れぬ覚悟で、後白河法皇に仕える女房たちを呼び寄せて言った。

「夕べは何となく都が騒がしいようであったから、是はまた比叡山の僧兵たちが神輿を担いで降りてくるのかと、それでも自分には関わりが無いことであると思っていたけれども、実は此の成経の身に及ぶ大事であることが知れた。父親の大納言が明日にでも斬られるかも知れないのである。そうなれば、この成経も同罪とされるであろう。今生の別れに法皇の御前に伺ってお顔を拝して行きたいけれども既に罪人とされた身では憚り（はばかり）多い。（このままだ顔せず退出する）法皇の御前に其の事を申し上げて欲しい……」

女房（女官）たちも事の重大さに気づいたから慌てて法皇の許に此の事を報告した。法皇も、自分が考えていた以上に事態が深刻なことにショックを受けて「……やはり、そうであったか、今朝がたに入道相国（清盛）から使いが来て（法皇の）身近にいる者たちも一人残らず（捕えて）清盛が尋問する……と言っていたから、その通りにしたのであるうけれども、どうして秘密が漏れたのであるうか……」と嘆かれるばかりである。

どうして漏れたか？と言っても、鹿ヶ谷山荘で酒を飲みながら、言わば「ドンチャン騒ぎ」で決めた

クーデター計画であるから漏れて当然！と思えるけれども自分の高い方は考え方が庶民とは違つて「お気楽」であるから逆に失敗のショックも大きいのである。どういふ訳か日本の歴史上で政府転覆などの陰謀が図られる場合は、飲めや歌えの馬鹿騒ぎの宴席が多い。凡そ五十年後に鎌倉幕府北条一族を倒そうと後醍醐天皇の取り巻き連中が謀議したのも芸者さんと呼んでの宴席であり其の時は女性に透けた着物を着せていたから陰謀も先が見えていた——それはさて置き——気を取り直した後白河法皇は、逮捕されに行く藤原成経を慰めるつもりで呼び寄せた。

呼ばれて成経も御前へ来たけれども、二人とも言うべき言葉が無くて只々、涙にくれるばかりで時だけが過ぎていった。時間に余裕がある訳では無いので丹波少将も着衣の袖を顔に押し当てて泣く泣く御前を退出し、その後姿を見送る法皇も「末代（仏教的な解釈）は心の重い出来事が多いものなのか……これ限りで丹波少将の姿を見ることが出来ないのか……」と仰せられて涙を流されたのは有難くも悲しいことである。法皇に仕える後白河院中の者たちも丹波少将の袖を抑え、袂にすがり名残を惜しんで涙を流さない者は居なかった。

どこが違うのか、父の藤原成親が捕まる場面と息子の成経が自首する場面とは大きな差がある。学者の説では此の章段は「人間の愛」がテーマになっているそうであるが、そうなると同じような罪で平清盛に顔を下駄で踏まれ口を裂かれてから首を斬られた西光法師と、平清盛が家臣に「もっと叩け！」と命じた藤原成親は人間扱いをされなかったことになり、人間の愛も施す側の都合次第で変わってくる、ということである。

細かいことは無視して、法皇の許を退出した丹波

少将・藤原成経は逃亡すること無く妻の実家である門脇宰相の屋敷、つまり清盛の弟で参議の地位にある平教盛の屋敷へ出頭して来た。間の悪いことには成経夫人（原本では敬称で「北の方」となっている＝公家などの正室は正殿の北の対屋に住んでいたので北の方と敬称された）は出産間近の身であったから、その不安に夫の逮捕という心配事が重なり、今にも命が絶えるかと思われるような絶望感に打ちひしがれている状態であった。当時の成経は、後白河法皇の許を退出する際に別離の涙を流した後で北の方が憂いに沈む姿を見ている。どうすることも出来ない自分が情けなく思えて呆然と立ちつくすばかりであった。

多分、北の方に付いていたと思われるが成経の乳母で六条という女性があり、若夫婦の嘆きが大きいことに大事が起きたと覚つて落胆のあまり「私は成経様の乳母として御奉公に上がり、お生まれになった時から抱き上げ参らせて、月日が過ぎるのに従つて自分が歳を取ることは忘れ、若君が成長されることだけが嬉しくて御奉公をして参りました。自分では短い間と思つておりましたが若君も既に二十一歳になりました。法皇の御所や宮中への出仕などで少しでもお帰りが遅いと何事か有つたかと心配をしながら過ごして参りましたが、今日のように時刻を遙かに過ぎて戻られた上に罪人として何処かへ連れ去られるような御心配で、これから如何なる目に遭われるかと心配で心配でたまりません……」と泣き伏してしまつた。

それを見た成経は、心中に不安が充満していたけれども乳母を嘆かせまいとして「あまり心配をするな：宰相殿（義父である参議・平教盛）がお居を下さるからには、助命嘆願はして下さいさるであろう……」と慰めたのだが、乳母にしてみれば心配の内容を具体的に

説明された様なもので、是がかえって心配になり、人目も憚らずにその場に泣き崩れて悶（もだ）えるばかりであった。

そうしている中にも、西八条の清盛館からは頻繁に使いが来て「成経の身柄拘束は未だか！」とうるさいので、教盛は「とにかく、向こうへ行つてみなければ先が読めない（対策が立てられない）」と、牛車の後部座席に丹波少将を乗せて出かけた。保元の乱、平治の乱から後に平家の株が急上昇したから、平家一門は良いことばかりが続いて何の心配事も無かつたのであるが、此の門脇宰相だけは謀反人一味の婿を持つたばかりに此の様な憂き目を見ることになつてしまつた。

西八条の清盛館が近くなつたところで教盛は牛車を止め、近づいて来た清盛の家来に取り次ぎを求めたのであるが、清盛からの命令で「丹波少将を屋敷内に入れてはならない！」と言われていたようで、仕方なく成経を近くの武士の家に留めて自分だけが門内に入つて行つた。

保護者の平教盛から離された藤原成経の周りには何時の間に寄つて来たのか、平家の軍勢が逃げる隙間も無いようにびつしりと取り囲んだ。それは成経を警護しているように見えるが、逃亡を防ぐ目的であることは離れ離れになつた牛にも分かるから、牛は牛なりに心配をしていた。自分を護ってくれる教盛と離されてしまつた成経の心の中は牛以上に心細いに決まつているが、是はどうすることも出来ない。一方で清盛館の中へ入れて貰つた教盛のほうも、平家一門の重鎮として出入りしていた普段と違つて、謀反に組みした婿の介添人として召喚されている身である。中門の辺りまでは通されたが、清盛に会うことが出来ない。

「何とかしなければ！」と気は焦るのだが清盛が出てくる気配は無い。近くで見ている清盛の家来たちも、何しろ相手が普段は清盛に代つて指図もする大物であるから、微妙な立場を察知して気の毒そうに見ているしかない。その中に源大夫判官季貞（げんだゆうぼうがんすえきだ）という検非違使の武士が居るのを教盛が見つけた。没落している源氏の末流である。平家の一門や子飼いの武士だと大親分の前で意見など言えないが司法警察権を持つ源氏系の家来ならば、清盛に怒られても傷が化膿することは無いと判断した平教盛は「苦肉の策」とも思える手段で源季貞を通じ、清盛に次のような申し入れをすることにしたのである。（清盛も内心では打開策を探っていた）

源季貞が代弁した平教盛の口上は次の通り——「教盛は愚かな者たちと親しくなり、自分の不覚を思うと返す返すも悔やまれてなりません。是を後悔するばかりでも致し方なく思つております。自分の娘を謀反人に嫁がせてしまい、その娘が身籠つており出産も近いことなので、もし婿とした成経が死を命じられるようなことがあれば、娘も生きては居ないと思われれるほど嘆いております。親としてはほど悲しく苦しいことはありません。勝手なお願いと承知は致しておりますが、どうか丹波少将を暫く此の教盛に預けて下さる訳にはいかないでしょうか。私がこの様に申し上げるうえは、どの様なことが有ろうとも絶対に間違いを起こさせようなことは致しません。どうか御慈悲を持つてお許しください。」

季貞は清盛から怒鳴られるのを覚悟して教盛の口上を正確に伝えたのであるが、聞いた清盛は不機嫌な顔をしながらも、一人つぶやくような口調で「困つたことだ。教盛はいつものように物の道理を弁えぬ（わきまえぬ）我が恨なことを言う」と言つて、暫く

は返事をしないでいた。季貞も、代理人ではあるが、どうして良いか分からず下を向いているばかりであったが、暫くしてから清盛がきつぱりと言い切つた。「新大納言成親は、この一門（金家）を滅ぼして天下を乱そうと企てた。丹波少将成経はその謀反人の嫡子である。平家と疎遠であるうが親しかろうが、また、誰が懇願しようが、この罪を許すことは出来ない。もしこの謀反が成功していたならば（清盛はもとより）教盛自身も無事では居られなかつた筈である。そのことを良く考えるように、教盛に伝えよ！」：言われた季貞は、清盛の怒りをリアルに伝える苦勞をしながら、其の事を報告した。聞いた教盛は当然のことながら失望を隠せない様子であつたが、誰に言うでも無く悲壮な口調で次のように語つた。

「：思えば保元・平治の乱から此の方、度々の合戦に出陣して平家を守り総大将（清盛）を護るために命をかけてきました。この後も平家の為に吹く荒き風を防ぐ決意は変わらないが、私も五十歳を過ぎて昔どおりの働きは出来ないかも知れません。けれども幸いに子供が大勢いるからには一陣の守備を固めるに不足は無い——その様な決意でいたにも関わらず、この度、藤原成経を暫くお預かりしたいとお願ひしたこのお許しが無いのは此の教盛に謀反の心が有ると思われたからでしょうか。その様に思われては武士の恥辱でもあり、平家一門に在つても意味の無いこととなります。今は職を辞させて頂き、仏門に入り何処か辺鄙（へんび）な山里にでも籠つて死後の冥福を願う為の仏道修行に励もうと思ひます。恨まない浮き世ですが、生きていればその望もあり、望が叶わなければ恨みも生じます。その煩惱を捨てる為には浮き世を捨てて誠の道に入る他はありません」

その言葉に並々ならぬ決意が秘められていたので、
先ず源季貞が慌てた。直ぐに清盛の許に飛んで行っ
て有りの俣を伝えた。「…宰相殿は本気で覚悟を決め
ておられます！大殿（清盛公）に置かれては、どの
様にでも宰相殿の御希望に沿えるように御決断頂か
ないと出家されてしまいます！」と言われたので、
さすがに聞いた清盛も驚いて「…それにしても出家
入道する…と言うのは普通では無い…（教盛に出家され
ると平家の痛手になる）其の様なことで有るならば致し
方ない（自分が折れよう）丹波少将の身柄を暫くの間、
宰相に預けることにしよう…と教盛に伝えよ…」と
言った。

季貞は自分の事のように嬉しく思い、直ぐに飛ん
で帰って清盛の言葉を伝えたから内心では喜びなが
らも教盛は「…さてもさても人が子を持つほど辛い
ことは無い。もし我が子の縁に繋がれていなかった
ならば是ほど、悩んだりはしなかった…」と言って
清盛の館を出たのである。

身柄を拘束されながらも教盛を待ち兼ねていた丹
波少将こと藤原成経は、戻ってきた教盛の姿を見て
「如何でしたか？」と声を掛けた。教盛は惘然とし
た口調で答えた。「入道（兄の清盛）は余りの怒りに
弟の私でさえも対面が許されなかった。傍の者を通
じてお願いをしたことも聞き届けられなかったけれ
ども私が出家入道すると申し上げたので、〃やむを
得ぬ（成経を）暫くの間、教盛の屋敷に留め置け〃と
仰せられた。（その後の事は指示が無く、是が良い結果だとは
思えないが…）」

成経は「その様なことでしたら、成経は御恩をも
つて暫くの間でも命が延びたことになるのでしよう
それにつきましても、父の大納言について何か仰せ
では無かったですでしょうか？」と聞けば、教盛も「情

況からして、とても其処までは思いも寄らない（質問出来ること
では無かった…）」と答えるだけであった。成経は涙を
流し「…誠に義父上のお蔭で暫くの間にしても私の
命が延びたのは嬉しいことですが、私が生きたいと
思っておりまして訳はもう一度、父（成親）の無事な姿
を見たいと思う一心だけです。大納言（父）が斬られ
ることになれば、自分でも甲斐無き命を生きて何の
意味がありましようか。この上の願いは、父と一緒に
に処刑されるように（清盛公に）申し上げて頂けない
でしょうか」と又も叶わぬ注文をつけた。

教盛は辛そうに、躊躇（ためらう）ように言う。

「それが私其方のこと（成経の助命嘆願）を申し上げ
るのが精一杯ではあったけれども、実は今朝がたに
内大臣（清盛の嫡男・後継者である平重盛）が清盛公を訪ね
て来られて大納言殿のことであれこれと説得をされ
た…ということを知っており、本当であれば暫（しば
ら）くの間は安心のように思えるのだが…」と言え
ば丹波少将成経は、泣く泣く手を合わせて喜んでいた。

先には「人が子を持つほど辛いことは無い…」と
思った平教盛であったが、成経の喜ぶ様を見て「や
はり子供でなければ、死罪かも知れない自分の身を
差し置いて誰が親の無事を是ほどまでに喜ぶであろ
うか。誠に真実の契（ちぎ）りは親子の中にある」と
思い返していた。やがて舅と婿の二人は、今朝方に
屋敷を出た時と同じように牛車に相乗りして帰って
来た。留守宅では女房や家臣、下僕たちが死者の生
還に似たような気持ちで無事の帰還を喜び、嬉し涙
で出迎えをしたのである。平家館ですつと待機させ
られていた牛が一番に疲れたことは「平家物語」に
は書いてない。

謀反人として合格した藤原成親・成経父子が釈放
される訳は無いから嬉し涙も一時的なものに過ぎな

いのだが、突き放した言い方をすれば親子は共に流
罪になり、何段か後の章段で罪人ながらも「あたり
と「はずれ」の組に分けられる。勿論、それは平清
盛が決めたことである。（続く）

工房オカリナアートJOY

母なる大地の音を自分の手で
紡ぎ出してみませんか。

あなたの家の庭の土で…、また大好き
な雑木林に一滴みの土を分けてもら
い、自分の風の声を「ふるさとの風景」
に唄ってみませんか。
オカリナの製作・オカリナ演奏に興味
をお持ちの方、連絡をお待ちしていま
す。

野口喜広 行方市浜2465
Tel 0299-55-4411

《ふる》

アレンジ書・楽譜・楽譜・楽譜の出版

（ギター文化館通り）

看板娘（犬）「うらら」ちゃんが

皆さんをお迎えいたします。

TEL 0299-476-08000

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

（白井啓治方）

<http://www.furusato-kaze.com/>

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会は、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」を基本軸として、自分の思いや考えを言葉に表現していこうと集まった者達の会です。

自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、その思いを言葉に表現することで希望の風を吹かせたいと考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額 2,000 円。(会報印刷等の諸経費)

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

風の言葉絵同好会参加者募集

全てが自由で自在であれ、のふるさと風の会から生まれた、兼平智恵子の風の言葉絵。

この新しい自分表現の「風の言葉絵」を楽しむサークルでは、一緒に言葉と絵を楽しむ参加者を募集しています。

詳しくは、兼平智恵子(☎0299-26-7178)へお問い合わせください。

ふるさと風の会 <http://www.furusato-kaze.com/>

「ことば座団員」&「朗読教室生」募集!!

劇団員の募集

ことば座は、霞ヶ浦を中心とした「ふる里物語」を朗読手話舞と朗読劇に表現する劇団です。ことば座では、スタッフ部門・俳優部門の団員を募集しています。ふる里劇団に興味をお持ちの方の連絡をお待ちしています。

朗読教室生の募集

朗読とは、物語を読み聞かせるのではなく、声に劇しく(はげしく)心を演じることを言います。物語や詩を朗読に表現する時は、言葉に紡がれた作者の心の真実をうけて、表現者として劇しく(はげしく)そのドラマ(物語)を演じる必要があります。

何かで自分表現をしたいと考えておられる方、朗読による自分表現を考えて見ませんか。演劇表現としての朗読の基礎を学び、朗読で自分表現を、また朗読で「ふる里の歴史・文化」をつたえて行きたいとの思いのある方、連絡をお待ちしております。

月二回程度の授業(受講料:月額 3,000 円)を考えております。

連絡先 080-3125-1307(白井)